

## 令和4年度第1回鹿児島市総合教育会議 議事録

□開催年月日 令和4年9月1日(木) 14時00分 開会  
15時00分 閉会

□開催の場所 鹿児島市役所 本館2階特別会議室

□出席者

市長	下鶴 隆央
教育長	原之園 哲也
教育委員	津曲 貞利
教育委員	小栗 有子
教育委員	立元 千帆
教育委員	前田 圭子
公益財団法人鹿児島市国際交流財団理事長 (事務局)	中藺 正人
企画財政局長	橋口 訓彦
企画財政局企画部長	尾堂 昭二
企画財政局企画部参事(政策企画課長)	中尾 詩野舞
企画財政局企画部政策企画課主幹	唐仁原 史之
教育委員会管理部長	中 豊司
教育委員会教育部長	山下 聖和
教育委員会管理部参事(総務課長)	小村 真二
教育委員会教育部学校教育課長	中村 武司
教育委員会管理部総務課主幹(企画調整係長)	黒木 浩幸
教育委員会教育部学校教育課主幹	福留 健之
教育委員会教育部学校教育課指導主事	山崎 大一郎
総務局市長室参事(国際交流課長)	湯之上 寛樹

□次 第

1. 開 会
2. 議 題
  - (1) 外国人の友達をつくる取組及び国際理解教育に関する取組について
3. 閉 会

## 会議要旨

### 1. 開 会

(政策企画課主幹)

それでは、ただいまから令和4年度第1回鹿児島市総合教育会議を開会いたします。会の進行は本会議の招集者であります、下鶴市長にお願いいたします。

### 2. 議 題

#### (1) 外国人の友達をつくる取組及び国際理解教育に関する取組について

(下鶴市長)

それでは私の方で議事の進行を行って参ります。

まず、傍聴について皆さんにお諮りいたします。事務局に確認しますが、本日傍聴を希望される方がいらっしゃいますか。

(政策企画課主幹)

傍聴を希望される方はいらっしゃいません。

(下鶴市長)

わかりました。それでは早速ですが、議題「(1) 外国人の友達をつくる取組及び国際理解教育に関する取組について」に入りたいと思います。

人・もの・情報の国家間の移動が活発化するなど、グローバル化が進展する中、国際交流を肌で感じ、その必要性に気づく機会を広げるとともに、一人ひとりが国際社会の一員として自覚することが重要になって参ります。そこで、国際的な視野を待つ人材育成に向け、外国人の友達をつくる取組及び国際理解教育に関する取組について意見交換を行いたいと思います。

また本日は、鹿児島市国際交流財団の中菌正人理事長にもご参加をいただいておりますので、後程ご意見を伺いたいと思います。

まずは、本市の取組について、当局と教育委員会から説明をお願いします。

(国際交流課長)

資料1をお願いいたします。国際的な視野をもつ人材の育成について、当局及び国際交流課の取組をご説明いたします。

まず、青少年海外派遣事業としまして、1の青少年の翼事業を実施しております。本事業は、青少年の国際的視野を広げ、外国との親善を深めるとともに、本市の国際化の推進に寄与する人材を育成することを目的としまして、平成2年から実施しております。

姉妹都市等であります、ナポリ市、ストラスブール市、パース市、マイアミ市、長沙市、マラッカ市に、本市の中学高校大学生等を派遣しております、これまで1,065名の青少年を派遣しております。

次に下の2のコロナ禍においても、青少年の国際的視野を広げる機会を創出するため、

本年度は、青少年国際交流オンライン体験事業を実施しております。先日 8 月 10 日のパース市との交流におきましては、高校生年代にあたるマター・デイ・カレッジの生徒たちと交流いたしました。

このほか、3 の青少年の海外派遣事業といたしまして、県青少年国際協力体験事業により、中学高校生を東南アジアへ派遣しております。

次に、資料右側をお願いいたします。令和 2 年度に開館いたしました国際交流センターでは、在住外国人や留学生等々、子どもたちの交流や、国際理解に関する取組を含む各種事業を行いまして、本市の国際交流や多文化共生の地域づくりを推進しております。

当センターでは、年間約 30 の様々なイベントを実施しておりまして、約 1,600 名が参加しております。

令和 3 年度には、1 の子ども同士の異文化交流会のほか、2 の外国人講師による各国の料理づくりや文化講座、3 の新入外国人の歓迎交流会等を通して、国際交流に関する機会を創出し、国際相互理解の促進に努めております。なお、多くの青少年にボランティアとして、事業の企画運営等に参加していただいております。

最後に右下のアジア青少年芸術祭開催事業でございますが、本市では、行政と市内の民間事業者等で構成するかごしまアジア青少年芸術祭実行委員会によりまして、アジア各国と本市の青少年が一堂に集い、音楽を中心とする芸術を通して、青少年の国際性の育成を図るため、平成 18 年度からアジア青少年芸術祭を開催しております。

この芸術祭にも、青少年ボランティアスタッフに例年 100 名程度、企画運営に参加していただいております。令和 2 年度から 4 年度は、この 3 年間コロナにより休止しておりますが、点線四角にありますとおり、3 年度は代替としまして、オンライン音楽祭を開催しまして、本市の青少年がアジア各国の青少年音楽団体と交流しております。説明は以上でございます。

(学校教育課長)

続きまして、学校教育の方から本市教育委員会の取組等を含めて、ご説明申し上げます。

まず、資料の 1 国際理解教育の推進の (1) 施策の概要をご覧ください。小中学校において、各教科における国際理解教育に関する重点内容等を明確にし、他国の言語や歴史、文化等について学習するとともに、本市が派遣する英会話の活動協力委員 A E A、外国語指導助手 A L T との学習などを通して、実践的なコミュニケーション能力の育成に努めております。

市教委は、市教育振興基本計画に示す国際理解教育を推進するために、市長マニフェストを踏まえるとともに、各学校の活動がさらに推進されるよう、外国語活動や英語科の授業等において、A E A、A L T を派遣したり、地域に住む外国人を招いた異文化体験活動の支援を行ったりするなどの施策に取り組んでおります。

それでは具体的な取組例についてご説明致します。(2) のアをご覧ください。本市では、小学校へ A E A、中高等学校へ A L T を計画的に派遣し、児童生徒が学んだ英語を使う会を多く設定すると同時に、コミュニケーション能力や国際感覚を高めるための言語活動や授業作りの研修の充実を図っております。

①にあります小学校へ派遣する A E A は、英語を担当する教員や担任をサポートすることが主な業務であり、小学校 5、6 年生で 1 クラス 53 時間、3、4 年生で 1 クラス 26 時間となるように派遣しています。中高校に派遣する A L T は、各学校の英語科の教諭と連携

を図りながら事業に取り組んでおり、1クラス当たりの活用時数は、中学校で19.2時間、高等学校で7.7時間となっております。

次に、アの②の中学生英語スキットスピーチコンテストの開催についてです。これは毎年10月、全市立中学校が参加する大会になります。スキットは中学2年生が2人1組で参加します。スピーチは3年生がオリジナルスピーチを披露し、それぞれ発声、発音、内容、態度等で評価されます。

次に、アの③ICTを活用した外国の人々との交流活動です。昨年度から新規で始めた事業で、今年は年3回実施する予定です。市教委と各学校をオンラインで結び、ALTがゲームなどの簡単なコミュニケーションを図りながら、オンラインレッスンを行うものです。生徒からは非常に好評で、他の学校のALTと英語のやりとりができて楽しかったなどの感想が聞かれました。

続いて右上のアの④各種研修会の開催です。各学校における外国語の授業等が充実されるよう、AEA、ALTそれぞれに対し研修を行っております。

次に、イをご覧ください。昨年度、武岡小学校が、外国への派遣経験のある12名の方を講師にワールドカフェスタイルで学習会を行いました。これはアカデミア育成財団の支援を受けて取り組みましたスクールドリームプロジェクトのひとつです。講師との交流は、子どもたちにとって、異文化について理解するだけでなく、世界の中で日本に求められている役割などについても理解することに繋がりました。

次にウの英語AIアプリの活用について説明します。市教委は、令和4年2月に株式会社ECCとの連携と協力に関する協定を締結し、トライアル校に指定した小中学校に対して、ECCから提供された英語AIアプリの有効性について、実践研究に取り組みせております。

他にもALTが他課の事業に参加し、国際理解教育を推進する活動がございますので、ご紹介いたします。

まず、2の(1)かごしま創志塾への参加です。これは少年自然の家が主管課となって行う事業ですが、ALTと塾生が自己紹介や英語ゲーム、英語で観光案内をするなどの活動を行います。今年度は8月4日、5日に行いました。

また、2の(2)レッツ・エンジョイ・イングリッシュですが、市立図書館の主催行事で、ALTによる外国語の絵本などの朗読を行うことを通して、参加者に英語の音声や表現に興味を持たせるもので、年3回実施しております。これら二つの事業とも非常に人気があると伺っております。

教育委員会としても、今後もあらゆる機会をとらえて、英語に慣れ親しみ、異文化について理解を深めるということで国際理解教育を推進してまいりたいと考えております。説明は以上でございます

(下鶴市長)

それでは次に、鹿児島市国際交流財団の中菌理事長からご意見をいただきたいと思えます。当財団では、市民主体の交流を促進するため、国際交流センターを拠点に、様々な取組を進めておられますので、その現状等についてお伺いしたいと思います。それではよろしくお願いたします。

(中菌理事長)

では説明させていただきます。この説明が少しでも皆様方の参考になれば幸いに思います。お手元の方には説明をする項目、それから、国際交流財団の国際交流ナビというものもお配りしていますが、こちらの方は、後ほど説明する事業の関係の写真等もでておりますので、ご覧いただければと思います。

まず本財団ですが、平成 26 年 4 月に鹿児島市によって市民主体の幅広い国際交流を促進することなどにより、国際都市鹿児島の発展に寄与することを目的として設立されました。

五つの柱となる事業を実施しており、国際交流、国際理解、国際教育、多文化共生の地域づくりの 4 事業の推進に加えまして、令和 2 年 4 月からは、先日亡くなられた稲盛京セラ名誉会長の寄付金によって、加治屋町に建設されたかごしま国際交流センターの鹿児島市所管部分の管理運営を行っております。

一つ目は、増える若い外国人と地域の活性化・多様化でございます。子どもたちのことを話す前に少し、本市の外国人の状況等を説明させてもらいたいと思います。

ご存知の通り、本市では、平成の終わり頃から人口が減り、高齢化も一層進んでおります。一方で、技能実習生や留学生などの若い外国人、特にアジア系の外国人市民が増えております。8 月 1 日現在の外国人登録者数は 3,469 人で、総人口 59 万 8,505 人の 0.6% ということで、率は低いのですが、この傾向は今後続き、この率も高くなっていくものと思われれます。

本市で学び、働き、地域で生活する若い外国人が増えることは、活性化や多様化を進めるためのエネルギーになるのではないかと考えております。地域経済への貢献ばかりではなく、多様なバックグラウンドを持つ人々と共生していくことは、地域の力となる人が増え、新しい交流がうまれるなど、地域の活性化にも繋がっていくと思います。日本人市民と外国人市民の交流や相互の理解促進、多文化共生の推進はますます重要になってくると考えております。

それでは、以下 4 点について説明をさせていただきます。

1 点目は、多様な交流ですが、本財団は子どもたちにも参加できる多様な交流を実施しております。国際交流の推進では資料にありますような、新入外国人との歓迎交流会や、資料にありませんが、留学生などに数時間ほど、日本の家庭生活を体験してもらい、交流を行う、在住外国人ホームビジットというものも実施しております。

国際理解の推進では、ネイティブによる英語だけの授業、インターナショナルカレッジですとか、ALT の皆さんが中心となって文化紹介や映画を上映する世界各国のアフリカ系文化紹介などを行っております。

次に国際協力の推進では、JICA 国際協力機構の協力をえて、中高生を対象とした国際協力ワークショップの開催や、国際協力に関するパネル展示を行っております。

多文化共生の地域づくりの推進では、資料にあるような子ども同士の異文化交流会や地域との連携事業、そして甲東中学校の生徒に、青年海外協力隊OBによる講話を行ってもらい、一昨年は、明和中学校の方に行きまして、多文化共生をテーマとした出前講座を、本財団の職員が行ってまいりました。講師には、国際交流センターに住んでいる留学生も含め、多彩な人々を迎えております。このような多様な交流を進めていくことが、子どもたちに興味を持ってもらうことに繋がるのではないかと考えております。

2 点目は、市民が主体の国際交流のきっかけづくりです。今年 5 月に、以前から本市に住んでおられるウクライナの方に、中学生、高校生、大学生を対象に、ウクライナの料理

講座と合わせて、ウクライナとロシアの歴史的な関係や、ウクライナ国民が現在の状況や将来をどう考えているかなどを説明していただきました。参加者からは「ウクライナのことをもっと知りたくなった」とか、「平和についてもっと学ぼうと思う」という感想がありました。

このように本財団の事業は、市民が主体の国際交流のきっかけづくりになっているのではないかと考えております。こういう体験というのは、若いときほど印象が強く、時にはその人の人生に大きく関わることもあるのではないかなと思います。

3点目は、継続的な関わりです。多様な交流できっかけづくりをしたら、それを継続させることが重要だと思います。そのために、例えば学校等で、国際交流による将来の選択肢ですとか、夢を提示してみたらどうかと思います。

留学経験者や青年海外協力隊OB、それから海外から帰国後に、通訳、翻訳、それから貿易等で起業した人などから話を聞くということもいいのではないかなと思います。

また、先ほど説明がありましたが、青少年の翼の参加者のOB会の設置とか、参加者が国際交流へのボランティア参加、姉妹都市等から来る学生のホストファミリーとしての受入れなど、この事業の開始当時は、こういうことを行っていました。もし現在やっていなければ、実施したらどうかと思います。

最後は、ボランティア体験ですが、本財団が特に力を入れているのは、若い人を中心とした、ボランティアの事業参加です。ほとんどの事業に参加があります。資料にあるアジア青少年芸術祭ですが、このボランティアは、中学生から26歳ぐらいまでで、マスコミでの広報ですとか、ステージイベントの企画運営、海外団体のお世話など、グループで分担しながら、様々な体験をしております。そしてこのことがそれぞれの参加者の自信ですとか、それから成長にも繋がっているのではないかなと考えております。

取組等の説明は以上ですが、本財団は多くの国際交流団体、ボランティアとのネットワーク、関係者との連携を持ちながら、こういう事業を実施しております。これと同じように、子どもたちが国際交流に関心を持ち、多様な事業に参加するためには、関係機関との連携、それから特に、保護者の理解と後押しが重要ではないかなと思います。親子で参加するイベントもあり、親が興味を持つとその影響は非常に大きいものがあります。ですから、親への情報提供も必要だというふうに考えております。

いろいろ述べましたが、本財団は、今後も青少年を含めた市民のための多様な国際交流を進めていきたいと考えております。以上で説明を終わります。ありがとうございました。

(下鶴市長)

ありがとうございました。それでは意見交換に入りたいと思います。

本日は、実際に教育現場で国際理解教育に携わってきた教職員も呼んでおりますので、意見交換の中でご質問があれば、現場の実態や意見を聞くこともできるようにしてあります。

まずは、教育委員の方々から、市の取組などをお聞きになって、何かご意見ご質問等ありましたら、お感じになったことなども含めて、ぜひお願いいたします。

それでは前田委員からお願いいたします。

(前田委員)

交流財団が、いろんなことに積極的に取り組まれているということを知りました。

子どもたちが夏休み何をしようかなというときに、鹿児島市が出している「アクト」だったかな。市が色々やっているイベントが、カラー刷りで刷られているものが配られていますが、そちらとの連携ができないものかなと思いました。既に連携されていますかね。見落としていたらごめんなさい。市ではないので難しいとか、財団であることが何かネックになったりするのかなと思います。ちょっと検討していただければと思います。

(下鶴市長)

ありがとうございます。やはり、特にこの夏休み、体験活動なども探している子どもたち、親御さんにとって、情報提供することが非常に重要かと思います。これは市の本体のみならず、関係の機関でやっておられることをまとめてご紹介することは可能であろうというふうに考えておりますので、ぜひ検討、調べていただいた上で、例えば漏れている部分、この取組を紹介すれば、もっと参加したい保護者や子どもたちに届くといったものがあれば、ぜひ、対応をお願いしたいなと思っております。ありがとうございます。

その他お気づきの点等ありましたらお願いいたします。

(中菌理事長)

私どもの方では、教育委員会の方からもそういう照会があった時には回答していると思いますが、通常、それぞれのイベントについてはチラシを作って、いろんな関係団体、学校等にも配布しております。その中で、こういうイベントカレンダー、3ヶ月ぐらいのものを作っておまして、まとめて周知できるようにしているのですが、これを各学校の方にもお配りして、周知をお願いしているところです。

ただ、これも生徒一人ひとりに、児童一人ひとりに届くというわけではなく、部屋や廊下などに掲示していただいていると思いますが、何かこう、お口添えをしていただければ、もっと周知ができるのかなというふうに思います。

(下鶴市長)

ありがとうございます。例えば市の方でもLINEを運用しておりますけれども、私としても、将来的には例えばそれぞれの方々の属性であったり興味範囲に沿った情報発信ができれば一番いいなというふうに思っておりますので、例えば、夏休み前の時期に、子育て中の方には、そういうイベント情報を集中的お届けできたりですとか、そういうところも今後検討していきたいなというふうに思ったところでございます。

それでは他にお気づきの点ありましたら、津曲委員お願い申し上げます。

(津曲委員)

まずはですね、コロナ禍の中にあっても、青少年の国際交流会に対して、鹿児島市及び教育委員会として懸命な努力をされて、オンライン等々で補完されていることに敬意を表します。ありがとうございます。

まず質問ですが、青少年海外派遣事業で、ナポリ市、パース市、マイアミ市、長沙市というのは、鹿児島市の姉妹都市でもございます。マラッカ市やストラスブール市は姉妹都市ではないと思いますが、これらの市には、毎年青少年を派遣されていたのでしょうかという質問ですね。もう一つは、それに対して向こうからは毎年来ておられるのか、

そこをちょっと教えていただきたいのですが。

(国際交流課長)

これまで、ナポリ、パース、マイアミには、令和元年度まで、それぞれ8名ほど派遣しております。ここ最近はできていないですけれども、相互交流ということで、こちらは毎年行っており、先方は隔年だとか、毎年ではないですが、来ていただいています。長沙市につきましては、コロナの前までは研修生ということで、受け入れていた経緯がありますけれども、毎年、相手方が来るわけではなくて、その都度、機会を通じて来ていただいている、鹿児島市の方からは、積極的に毎年人を派遣していきまして、今のところ8名ずつ派遣していますので、5都市ということで40名ぐらい毎年派遣しております。これからも続けていきたいと思っております。

(津曲委員)

ありがとうございました。この姉妹都市については本当に鹿児島市からは、一生懸命交流をされておられるのを、私もずっと見ておりまして、担当の方々含めてやっておられますが、相手の市の方がどこまで積極的かというのは、いろいろと温度差があるなっているのも、実はよく存じているところでございます。

たぶん、これからもこの姉妹盟約を結んだところとの交流をということになれば、やはり双方向なのかなと思っております。ぜひ、先方の市からも、若い青少年が、鹿児島に来られて、継続して、青少年の交流が続く、あるいは行った方同士が、ホームステイがどこまで入るかということもありますけれども、相互交流をして、そこでさらに交流を深めるような、そういった取組ができればいいなと思っております。行ったきりではなく、次リピートして、どのぐらい深め合うかといったところについては、現実的にも難しいところがたくさんあるのですが、ただ、何となくこの市との関係をさらに深めるということからすれば、この相互交流を、もっと深めてもいいのかなというような気がしたところでございます。

ここからは、さらに意見ですけども、この姉妹盟約のところも重要ですけども、それだけでいいのかっていうようなところもありまして、今後、鹿児島市として、子どもたちを中心として、行かせたい都市だとか、あるいは行きたい都市っていうのはほかにもあるのではと思っております。例えばですけども、ビジネス的な視点からすれば、シリコンバレーとか、サンフランシスコというのは、長澤鼎だとかいろんな関係もあったりしますし、そういった姉妹盟約以外のところでも、行きたいっていうところだとか、広げられないかなとか、あるいはビジネスの拠点という意味からするとシンガポールというのは、非常にこれから発展していくまちでもありますし、そういったところの交流っていうところで触発されるような、青少年が出てくればいいなと思ったりするところでございます。

加えてですね、そういうところには探せば必ず鹿児島にゆかりのある人がおられたりして、姉妹盟約は都市対都市ですけども、さらにそこを少し広げるとすれば、そういうビジネスだとか、勉強になる都市、或いはそこで活躍している鹿児島市出身の方とのネットワークとかですね、そういうところでもう少し深める、交流からビジネスとまではいかないですけども、交流プラスアルファで深められるような関係ができればいいのかなという感じでした。

(下鶴市長)

ありがとうございます。今おっしゃるように、双方向性ということは重要だと思いますので、ちょうど私も 10 月にはストラスブールの方に伺う予定がありますので、その際にも、ぜひそちらからも定期的に来ていただきたいと、そういった話をしたいと思っております。

また、訪問先の選定につきましても、例えば、そのビジネスの面におきましては、県の方で、青年経済人を出す事業を確か国際線を持っている上海、香港等でやっていたと思いますが、そういったところとの相乗効果や、そこでどこまでカバーしているのか、うちでカバーすべき部分はどこがあるのか、そういったところも考えながら、検討していければいいのかなというふうに思った次第です。ありがとうございます。

それでは、小栗委員からありましたらお願いします。

(小栗委員)

少し長くなるかもしれませんが、可能性がある子どもたちって、興味がある子たちは、いろんな可能性が市として提示されていて、それは本当に市の強みだなと思っていますが、一方で今回の議題にあるように一人ひとりが国際社会の一員として自覚するというふうに言ったときに果たしてそれだけでいいのかということですね。つまり国際交流と名を打つと、当然そこに興味のある子達が集まってくるのですけれども、関心のない層には結局アプローチ出来ないですよ。これからは、せっかくのチャンスに行きたいと思う層を、数をどう増やしていくのかということところが大事じゃないかなと思います。

それをする時には、少し発想の転換が必要ではないかということ、ひとつ大事なものは国際交流を非日常ではなくて日常にしていくということですね。国際交流を日常生活に置いていこう。それは、どういうことかということ、在住外国人を訪問客として認識するのか、それとも鹿児島市民として、住民として加えるのかということだと思っただけです。

私も鹿児島市のALTを見てみたら、反省するところがあったんですけども、実は2019年にALTの調査が鹿児島でされているんですね。その中で、興味深いデータが出てきているんですけども、1つはALTが職場でコミュニケーションがうまくとれているかということ、やっぱり半分くらいはできていないって回答があるんですね。学校の外で、地域で活動しているのかということ、これも興味深いんですけどもALTは地域に出たいけど、でも、自分たちは声をかけてもらうことはないということですね。つまり、ALTは地域に溶け込みたいんだけど、その土壌がないと、その結果、どういう状況が出てきているかということ、ALTも任期が終われば残りたいという一定層はいると思うんですね、その人たちは結局、鹿児島には定着せずに、県外に出ていく状況があるんですね。

要は、非日常にしていくには、学校の外の教育機会を作っていくことが大事になる。今年、私も創志塾の講師を務めたんですけども、子どもたちが言っていたのは、ALTと交流したいということですね。つまり、学校では教わってはいるんですけども、日常的な交流が持てないということの裏返しなんじゃないかなと思ったんですね。

県内では、鹿児島市ではないですけども、面白い地域との活動をされていて、先程、いろんな組織があるということですけども、あるまちでは、技能実習生などいろんな在住外国人がいるんですけども、その方々の日本語教室を自前でやっていたんですけども、それを市の社会教育が引き取って、それを公開講座で10年以上やっている、そんな

ると、どういう状況が生まれていくかということ、そこで学んだ外国人の方々がボランティアとして参加するんですね。そうすると、日本語教室なんだけれども、一方的に教える教えられるではなくて、外国人の方も講師になる。お互いが学び教えあうという形で、そこが日常的な交流の場になると思うんですね。

鹿児島市であれば、例えば、荒田小学校では、親父の会が地域防災ということで、外国人も一緒に巻き込んだ形での防災の1日寝泊まりのイベントをされていたりするんですね。なので、結局今、理事長の報告にもありますように自治会自体が外国人の力なしには成り立っていかないというもので、消防団なんかいろんな関わりがあると思うんですね。なので、例えば、あいご会にALTが参加すればそれだけで魅力が出てくると思うんです。そこには、ALTだけじゃなくても技能実習生でも、留学生でもいいと思うんですけれども、学校に閉じないで、ここで在住している人たちの地域に溶け込んだ先で子どもたちが、子どもだけじゃなくて、多世代で交流できるような仕掛けをどう作っていけるのか、というのが一つあるのではないかなと思うんですね。

外国っていうと、どうやって英語を学ぶかっていうふうになってしまいうけれども、実はコミュニケーションをとるには日本語でも十分足りると思うんですね。しかも英語圏じゃない人も来ているわけで、今もすでに活動しているわけですが、やさしい日本語っていうことで、その日本語を通じて向こうの文化も知るし、そうする時に、住民としての外国人の暮らしのサポートにもなっていると思うんですね。そういったことをどう展開していくのかということの一つ提案したいと思うのと、それをやるときにいくつか課題があると思うんですね、その中で、一つが学校の外に出ていくと言った時に、当然学校の先生方の理解もあるし、学校と地域をつなぐ人たちが必要なんですね。

県外の一つの事例としては、非常勤の教員で、人権同和などに取り組んでいたりして、地域とつなぐ活動が、在住外国人の問題ということから取り上げて展開していくことがあると思うんですね。そういった可能性もあるし、あと、まだどこもやっていないと思うんですけれども、例えば地域おこし協力隊というのは、だいたい地域振興という形でやると思うんですけれども、学校と地域をつなぐような、地域内国際交流みたいな、日常的なものをやるという形の活用の仕方もあると思うんですね。だから、そういった人同士をどう繋いでいくことがあるかなと思います。これは人ということですね。

あと、もう1点大事なかなと思うのが、今理事長さんの方から、いろんな交流の機会、異分野とか繋がりがあるということなんですけれども、鹿児島市にも、小さい団体がいっぱいあると思うんですね。そういった団体の抱えている現状だとか、課題だとかそういったものを共有できるような会が必要なんじゃないかなと考えております。一つ例にあげれば、鹿児島市には名山に日本語学級があると思うんですが、あそこの実態がどれだけ共有されているのかというのは、関わっている人しか知らないと思うんです。これを一つとったとしても、今活動していることが、閉ざされている状況ではなくて、開いて、どうやって新しい組み合わせを作っていくのかだと思うんです。あいご会とALTをつなぐというのも新しい組み合わせだろうし、他市では技能実習生が学校に講師としてきているという事例もあるんですね。そこらへんの新しい組み合わせで、どう作っていくのかということも、やっぱりまずは情報共有をして、お互いの課題、出来ること、出来ないことっていうようなそんな場が必要ではないかなと思っています。

ネクストアジアで、津曲さんも確か関わっていた、企画課がやっていたもののようなんですけれども、そういった戦略というかですね、分野横断的に何が課題で何ができるのか

っていうことを、もっと多様な人達と議論した、もうすでに私の同僚なんかもやっていたりしているんですけども、そういったものを展開していくということが一つ大事ではないかなと考えております。

あともう一つあるんですけども、続けていいですか。今は非日常にどうしていくかということなんですけれども、もう一つ考えていく必要があるかなと思うのが、夜間中学校の問題について、2026年までに都道府県すべてに夜間中学校を設置するという事で、当然、鹿児島市も無関係にはならないと思うんですけども、この夜間中学校がもちろんこれまで学べなかった人、在住外国人というそういった方々なんですけれども、だから、むしろそれをプラスの発想で、国際交流の拠点として、せっかくその多様な人たちがいるわけなので、これまで学ぶ機会がなかった人たちだけの場にしないで、結局在住外国人の方々も、一緒に学ぶわけですよ。そこをもっとその核にしていくようなそんな可能性もあると思うんですけども、今ようやく県が調査を始めたところで、鹿児島市も実態調査はこれからだと思うので、ぜひそんなことも視野に入れてもいいのかなと思います。以上です。

(下鶴市長)

ありがとうございます。ご指摘の通り在住外国人の方々が地域社会に溶け込むための工夫というのは、もっともっと必要なのだろうなというふう感じた次第でありまして、一つはやはり在住外国人の方々にとっても、もっと地域に溶け込みたいのに、どこを接点にすればいいのかわからない。こういったところが、あるのではないかと思いますし、ぜひご提案通り、国際交流の団体・サークル、そして実際の在住外国人の方々、ALTの皆さんをはじめ、そこの方々から、こういったところでお困りなのか、こういったところの現状把握が必要だろうなと思った次第です。

ここがうまくできてくると鹿児島の子どもたちも、この外国人の方々との接点が増えていくだろうと思っておりますし、最初にご指摘の通り、例えば、関心が高くて、なおかつ経済的にも可能な人は留学に行けるんですよ。短期も含めて。ただし、そうじゃない子たちにどう機会を提供するか、ここが非常に重要であるというふうな問題意識から考えておりまして、そういった面からも、在住外国人の方々をもっともっと地域に溶け込んでいただいて、そして、鹿児島の子どもたちとの接点も増やしていくということは、非常に重要だと考えています。

また夜間中学については、ご指摘のとおり、県の方で実態把握、そしてもちろん市としても協力をしておりますけれども、その中で、他県の事例も含めて、拡張の可能性がどこであるとか、そういったところも論点になっていくだろうなというふう感じたところでございます。

(立元委員)

まず一つ興味から教えていただきたいのですが、今年8月1日時点で鹿児島市にいる在住外国人が3,469人という中菌理事長のお話だったんですが、例えば、コロナ前で一番多かった時期で何人ぐらいいるのかなってというのが気になりました。要は、コロナ禍になって、減ったのか、それともそんなに変わってないのか、いかがでしょうか。

(中菌理事長)

先程の人数は今年8月1日現在で、令和2年4月1日現在で3,346人です。その5年ぐ

らい前の平成 28 年だと 2,122 人ですから、この期間、先ほど言いましたように、技能実習生や留学生など、どんどん増えてきて、特にベトナム、ネパール、それからインドネシアやミャンマーも増えてきています。

そして、先程のとおり 2 年 4 月 1 日が 3,346 人、それが 3 年 4 月 1 日では 3,330 人。4 年 4 月 1 日では 2,970 人ということで、やはりコロナの影響をうけて入国する人が減ってきているということで、だんだん少なくなってきましたが、今年になって、入国規制が緩和されてきているということで、また、だんだん増えてきている。コロナの影響はありましたけど、その影響がだんだん薄れてきているという状況です。

(立元委員)

以前であればずっと右肩上がりで増えていたところが、コロナ禍でいったん下がって、少し緩やかになって、また今後増える可能性があるということですかね。そのように理解しました。

私の国際交流に関する意見なんですけど、国際交流って子どもにとって得られるものとして大きく二つあるんじゃないかなと私自身は考えている。

まず一つは、知ること単純に知ること。それが視野を広げることになのかなと、そして視野を広げるということは、将来において職業的な選択肢を広げることになったり、不登校であるお子さんとかで、何となく生きにくさを感じている子たちが、何かしら先にある選択肢を広げることにならないかなと、ちょっと希望的観測も含めてなんですけど、そういうふうに繋がるのが一つのメリットかなと思います。

あともう一つは、海外に何年か住んでいた妹の言葉を借りてなんですけれど、海外に住んで思ったことが、日本人であることを強く意識すると彼女がすごく言うんですね。要は内側から見る日本と外から見る日本、海外に住むことによって、自分が日本人であることを強く自覚するといっていたのが、すごく印象的なんですけど、要は郷土愛につながるような感情を強く持つんだなと私は思いました。郷土愛を育むような授業をいくつかされているとは思いますが、国際交流自体がそういうものにつながる可能性もあるのかなと私自身が話から思ったところです。

そういうことで、国際交流を通じて一人でも多くの子どもたちが特に感受性の強い時期に、より深い交流をすることによって、これらのメリットが得られたらいいなというのが私の感想です。

(下鶴市長)

ありがとうございます。海外、そして国際交流が、郷土愛を育むことに繋がるということに全く同感でありまして、実際、私も先般、東京の方で市政報告会を開催してきましたけれども、関東の方々、県人会の方々、ものすごく郷土愛を持ってらっしゃって、おそらく、国内外の違いはあれど、鹿児島を離れてみて、やはり鹿児島の出身だというアイデンティティ、そして鹿児島よさに気付くというところがあるんだらうなというふうに思います。従いまして、国際交流の推進が、郷土愛の醸成に繋がっていくということは、まさにその通りだろうと考えております。

国際交流、そして相互理解の促進を通じて郷土愛の向上にも繋がっていけばいいと考えております。ありがとうございます。

それでは、原之園教育長からは、お気づきの点ありましたらお願いいたします。

(原之園教育長)

私、自分の経験から、甲南の校長をしていた頃ですけれども、鹿児島大学の協力を得ながら、探究活動、例えば災害時のトイレの活用ですけれども、そういう研究をさせて、それを英語にして、スピーチコンテストをしてもらおうということをしました。当時、市長に審査員になってもらったこともあります。それをやっている中で、子どもたちがどんどん変わって行くんですね。

また、国のスーパー・グローバル・ハイスクールという事業に参加して、それから同窓会に協議してもらってお金を集めて、2年生 15、6名をイギリスのオックスフォードに10日間ほど送って、1年生を15名ほど、同じように10日間ほど台湾に送ったことがあったんですが、子どもたちがどんどん変わっていくんですね。

何が変わったかという、言葉の貧困といいますか、今の子どもたちは非常に言葉が少ない。「やばい」とか「えぐい」とか、その言葉で終わっちゃう。そこで誤解が生じて、いじめがあったりするんじゃないかと私は思っていたんですけれども。相手に伝えなきゃいけない、そして、日本語を意識して、英語にしなければいけないということで、すごく丁寧な日本語を喋るんですね。伝えなきゃいけないから。そうすると言葉に対する意識が上がって来るんだから、コミュニケーションの能力も上がっていく、そして自分も変わっていく。進路に対する思いも変わって行く。彼らの学びの原動力になるのは、目標を持つことでしょうけれども、同じ目標を持って共有していくということが、そういう状態に近づけていくのではないかなと思う。

そして、その中で、向こうに行ったら鹿児島のことを話をしなきゃいけない、日本のことを知らなかったことに気付く。だから国を愛する心というか、郷土を愛する心がすごく芽生えて、子どもたちが驚くほど変わって行ったのを実感してまして、言葉っていうのはすごい大きいと、海外に行くということもですけれども、コミュニケーション、人に伝えるということ、これはすごく大事だと思っています。

今、鹿児島市でもいろんなことがある。根源にあるのは、言葉が貧しくなっていて、省略して、そこに誤解が生じて、伝わって行かない。別の言語を知ることによって、日本語まで意識するんじゃないかなと私は思っていてまして、言葉という観点からも、国際交流を強力に進めていきたい。これを広げていけば、例えば、いじめとかそういうものも変わってくるんじゃないか、収まってくるのではないかと。みんな伝えられない、「やばい」という言葉で、それで全部終わってしまう。女の子たちのグループLINEのやりとりで、この前びっくりしたんですけれども、「どこどこのお店に行こうよ」、「私行きたい」、「何で行くの?」と、この「何で行くの?」と言った方は、バスで行くのかタクシーなのかというつもりで言ったんですけど、言われた方は「どうしてあなたが行くの?」というふうな受け取って仲違いが始まってしまった。言葉が足りない。そういうことが実際多々あるのではないかなと私は思っていて、国際交流を広げていきたいし、まずはその基礎となる言葉ということ。これを鹿児島市内の学校でも進めていきたい、広げていきたいと思っています。自分の経験からそう思ったところでした。

(下鶴市長)

ありがとうございます。国際交流の経験を通じて、日本であったり、鹿児島であったり、伝統文化も含めて、自分の理解が足りてなかったと感じることは、まああることだろうと

いうふうに思います。そのため、特に早い時期に、外国人の方々との交流を持つ機会を通じて、もっともっと自分たちのことを、ルーツを知らなければならないということであったり、そしてやはり、通じないという経験を早めにするのも大事だろうなと思うんですね。今言われたみたいに、正確に伝えるためには言葉選びも考えなければいけないし、当然語学の話もあるし、通じないという経験を早めにしてもらって、だったらもっと自分たちのことを知ろう、そして語学についても、学校で言われて点数が付くからやろうじゃなくて、コミュニケーションをとりたい、だからやりたい、こういったところにつなげていくことが大事です。そのためには、いかにして早い段階に、そしてより多くの子どもたちでその接点や場を作るかということが非常に重要だと思っていて、その点、先ほど小栗委員からご指摘ありましたとおり、せっかく住んでらっしゃる外国人の方との接点、もっともっと地域社会に溶け込んでもらい、特に溶け込みたいという人が溶け込めるような、そういった環境整備が重要だろうなと思いましたし、一度、話をしないといけない思ったところでありました。ありがとうございます。

それでは、その他お気づきの点ありましたら、はい、お願いします。

(津曲委員)

コロナ禍で、政情不安もあって、リアルな交流が図りにくい時代なので言うんですけども、ようやくコロナも収まりつつあるが、まだいつ来るかどうかかわからないと思っていて、私もリアルで行くことはものすごく重要で、やっぱり行ってみないとわからない、百聞は一見にしかずみたいなこともありますから、当然これからも交流を重視していきなきゃいけないと思うんですけど、交流だけに頼りすぎちゃうと、こういう状態になると、そこで途絶えてしまうみたいなのところがありまして、今後はハイブリッドで考えるべきじゃないかと思っていて、オンラインでの交流というものを、リアルで行けないからオンラインじゃなくて、リアルで行くけどオンラインもやると、パラレルで考えていく必要があるんじゃないかと思うんですね。

ナポリ、パース、マイアミ、これらはこれからも姉妹都市でもありますし、これまでの伝統も歴史もありますからリアルに行きやすいところだと思いますが、やはりそういうところとのオンラインで、ちゃんとパートナーを向こうに見つけるとか、そういうことをしていくことによって事前予習もできますし、行った後の交流も続きますし、行きっ放しとか1回だけとかではなくて、交流を重ねていくためには、私はオンラインをもっと重視してもいいんじゃないかなというふうに思いました。

オンラインとなれば、先ほど申しましたように、シンガポールだとか、これから交流したいというところについても、うまく探せばできていくような気がして、やはり行けなくなったから交流が進まないということではなくて、もっとオンラインをうまく活用して、そういうところを広く、見つけてもいいのかなというふうに思いました。

それから、姉妹都市もいいですけども、ナポリ、パース、マイアミ、長沙なんかもそうですけど、いずれもダイレクト便が一つも飛んでないんですね、やっぱり行こうと考えるとなかなか大変で、そうすると台湾とか香港だとか、上海、韓国、なかなか難しいかもしれませんが、ダイレクトでいくところとの交流っていうのは結構ネットワーク作るのは早いんですね。そういうことも考えてもいいのかなと思います。

いずれにしても、オンラインをパラレルで進めるということこれから考えていかないといけないのではと思います。大学でも、交流が途絶えて1年ぐらいどうしようかという

ことで学生たちは本当にかわいそうだったんですけど、例えば鹿児島大学ではコラボレイティブオンラインインターンというのをやってまして、そこで大学同士で交流する、今までは行った場所としか交流できないんですが、オンラインですからもう3ヶ所も4ヶ所も交流できるようになってるんですね。却ってその方が学生たちの満足度は高くなって、行かなくても国際関係では充実した教育ができていたというような報告が上がってきてますので、やはりオンライン型の交流を、平行で増強していく必要があるなと思いました。

(下鶴市長)

ありがとうございます。やはりこのオンラインの活用というのはまさにこのコロナ禍で出てきた新しい可能性だと思っておりまして、丁度、冒頭で説明していただいたパスとの生徒同士の交流、そして確か先だっては、ストラスブールの方とオンラインでの交流もやったかと思えますので、これから手探りだと思えますけども、どういうふうにやれば、より良いコミュニケーションがオンラインでとれるのか、こういったところについて、経験を生かしながら磨き上げていって欲しいと思います。

そして、交流先の拡張についても、ちょうど私自身も、いろんな大使館の方々との交流も定期的にやっておりまして、先般の市政報告会にも各国の大使館、領事館からもお越しいただいたので、そういった方々とも可能性を模索していきたいと考えております。

それでは、ぜひ中菌理事長さんから、ありましたらお願いいたします。

(中菌理事長)

先ほど、関心のある子どもたちだけが参加するという話がありましたが、学校でいろんな機会を設けることができるのであれば、例えばタイムリーな話題、先ほど申し上げました、ウクライナに関する話題ですとか、イスラム関係の文化や習慣は日本と非常に違いがある、そういう特に日本人に馴染みが薄いような話題というものも、場合によっては関心が得られるのかなど。我々は日常的なイベントの中で日本語支援をしたり、日本文化の理解講座などをやったりしていますが、そこに参加した人たちが、逆に我々の方のお願いによって講師になったりとか、それからサポートしてくれたり、そういう関係ができておりますので、学校でも、例えばですが、外国籍の親御さんなんかもいらっしやるでしょうから、そういう方々と繋がっていったネットワークを作って、そういう方々がそれぞれ自分たちの国のネットワークを持ってらっしゃいますので、そういうところから、参加してもらおう人たちを集めてくるということもできるかなと思います。

それと、これは非常に昔から感じているのですが、国際交流に関しては、女性の参加は多いのですが、男性の参加は非常に少ない。これは関心が違うんだろうと思うんですけども、ただそれは関心のある、いわゆる外国人を集めてやるということだけでなく、その関心のあるテーマ、例えば、男性生徒がスポーツに関心がある方、スポーツを通じての交流。eスポーツとかそういうものもあるのかなと思うんですけども、姉妹都市の交流でも昔は野球とかバレーボールとか、そういうものを通じての交流をやっていました。ですから関心のあるものを媒体として、外国人と交流するとそういうことも可能ではないかと思えます。

それともう一つ今申し上げましたが、保護者の方々、これはちょっと今子どもと離れてしまうんですが、よく聞く話では、学校や行政からいろんな文書が来るが、日本語が非常

に難しい。特に漢字が読めない、何が書いてあるか分からない、学校からいろんな通知が来るけど、どうしたらいいか分からない。もしその人に日本人の友達がいたりとか、日本語をよく知ってる外国人の友達がいると分かるんだけど、そうじゃなければ、もうそのままにしておくということもよくあるようです。

これはですね、去年の3月に、文化庁の文化審議会国語分科会が、公用文作成の要領の報告の中で、日本語を母国語としない人がどんどん増えてきている。そこで、そういう人たちが安全で安心して生活できるよう、いろんな広報を正しく理解してもらうために、やさしい日本語を使いましょう。ということで、これは国の公用文ですけれども、地方公共団体でもそういうことをしてはどうでしょうか。納税の通知ですとか、それから、児童手当の通知だったら毎年やっている人は分かるんでしょうけど、新しく来た外国人にはわからない。ということで、やさしい日本語を使った上で、そこで、保護者の方々と学校といろいろな意思疎通がなされてくると、先ほど言ったような、国際交流のきっかけとして、そういう方々に協力いただけるということもできるんじゃないかなと思います。

(下鶴市長)

ありがとうございます。今ご指摘いただきましたように、やさしい日本語、私はこれ、書き言葉より話す言葉だというふうに理解をしているんですけども、これは非常に重要だろうなと思っておりまして、私自身も外国人の方々にいろいろお話をする時には私なりに、考えながら話をしているところでありまして、ぜひ、このやさしい日本語という考え方が、もっともっと広がっていくことを願いたいなと思っておりますし、また、財団の方でもいろいろプログラムをご用意できると思いますので、それを教育現場で活用してもらえそうな取組も必要かなと思いますね。例えばイスラムの習慣や文化の話や、ビジネスの話もしていただきましたけど、イスラムの礼拝の話、食べ物のお話、お酒なんかはですね、きっとビジネスやっていく上で、深くは知らなくてもいいけども最低限はやっぱり持っておかなきゃいけない教養だろうと思っていて、そういった意味でも、子どもたちが将来ビジネスで活躍する際にも役に立つのかなというふうに思った次第です。

### 3. 閉 会

(下鶴市長)

いろんな話は尽きませんが、時間がちょうどとなりましたので、一旦意見交換はここまでとさせていただきます。皆さんからいただきましたご意見は、市長事務局と教育委員会の双方で、事業実施にあたっての参考とさせていただきます。

それでは、本日の会議はこれで終了いたします。ご協議いただきまして、誠にありがとうございました。